

## 第35回 日本動物児童文学賞の受賞者及び入賞作品

第35回 日本動物児童文学賞には、104作品の応募があり、児童文学関係学識経験者による第一次審査を経て、動物福祉・愛護関係学識経験者や関係省庁関係者等からなる第二次審査委員会を7月19日に開催し、下記のとおり入賞作品として、大賞1作品、優秀賞2作品、奨励賞5作品が選定された。なお、受賞作品の表彰が令和5年9月23日開催の動物愛護週間中央行事の屋内行事にて行われた。

## 入 賞 作 品

## 【日本動物児童文学奨励賞】

## 【日本動物児童文学大賞】

## 「猫と戦争」

まきうちれいみ（東京都）

〈受賞理由〉戦争体験者の祖母と戦争を知らないひ孫との世代間でのペットへの扱いの違いは、動物愛護に関心を持つきっかけになると同時に、被災時のペットとの避難のあり方についても考えさせられる作品である。また、戦時下に幼少期を過ごした主人公が、国のために自身の飼い猫を献納したつらい経験をリアルに描写しており、戦時中特有の相互監視の雰囲気や、貧しい生活の中で国のために生きる様子は、子どもたちに過去の歴史について知ってもらいきっかけともなり得る作品である。

戦争という重いテーマを扱っているが、祖母とひ孫との軽妙なやり取りによって、物語が重く悲しいだけでなく、バランスが保たれた読後感がよい作品となっている。

## 【日本動物児童文学優秀賞】

## 「ぼくがライフに出会うまで」 川瀬えいみ（東京都）

〈受賞理由〉小学校入学と同時に引っ越し、友達がいなまま三年生になった少年が、国語の時間に書いた家族についての作文がきっかけで家族で犬を飼うことを検討することになるが、両親は動物を飼う「覚悟」について少年に問いかける。両親のペットとの辛い経験が語られる場面では、適正飼養や終生飼養の課題について、自然と考えさせるような構成になっている。

また、子どもながらに親に気を遣って本音を打ち明けられない少年の様子や新生活の不安、反抗期など、子どもたちに深く共感を与え得る内容を織り交ぜつつ、生き物を飼うことの責任や命の大切さを説くと同時に、家族との絆を描くことで読者に共感と学びをもたらしている。

## 「シュガーにさよなら」

伊東葎花（茨城県）

〈受賞理由〉三年前、お母さんのうっかりで逃げてしまった飼い猫のシュガーに、主人公の愛実が校外学習の農業体験で訪れた農家で再会する物語。シュガーと再会した喜びの反面、他の家の猫として過ごすシュガーへの複雑な気持ちなど、愛実の心情が丁寧に描かれており、読者の共感力を育むことができる作品となっている。

都会にある愛実の家と田舎にある農家でのシュガーの様子を通して、人や地域によるペットの安全管理や飼育の意識の相違、予防接種などの飼い主の責務について考えさせる要素も含まれており、自らのペットに対する責任を深く考えるきっかけを得ることができる作品である。

## 「カメ様の思し召し—ぼくのカメ飼育録—」

タケルノミコトモドキ（東京都）

〈受賞理由〉カメの飼育方法や生態について非常に詳細に描かれており、餌のあげ忘れや掃除を怠ってしまうなど、ペットの飼い主が共感できるようなエピソードを交えて飼育の難しさや奮闘がリアルに描かれている。また、終生飼養の重要性や飼い主の責任についても説かれており、読者へペットを飼うことについて考えさせるきっかけを与えるとともに、学校という身近な環境で起こり得る出来事を通して、友達、先生との関わりの中で子どもたちが成長していく姿がよく描かれている。

人と動物の共通感染症にも言及し、読者に対して意識を喚起する役割も果たしている一方、所々でファンタジー要素を巧みに取り入れることによって、堅苦しさが緩和され、より魅力的な作品となっている。

## 「おかえり リキ！」

横田善広（福島県）

〈受賞理由〉東日本大震災で被災した家族が、ドッグトレーナーの被災犬保護活動により、被災地に取り残ってしまった愛犬と再会を果たす物語。

町の様子や置き去りにされたペットの様子などがリアルに描かれており、被災地や被災ペットの深刻な状況を、臨場感をもって感じ取ることができるような作品である。

飼い犬のリキを置き去りにした後悔や、再会の喜びなど、多様な感情が描かれており、読者に深い感動をもたらす、作品に引き込む要因となっている。

また、被災ペットの保護活動に焦点を当てており、保護活動の難しさや苦勞が詳細に描かれている。ペットの育て方による保護活動への影響など、普段からの適正飼養の重要性についても教えられる内容であり、動物飼養に対する意識を深めるきっかけとなり得る作品である。

## 「クリスマスホーリー」

名倉せてら（愛知県）

〈受賞理由〉壮年男性のロバートは、唯一心を許せる存在である執事の入院をきっかけに、警察犬には向いていないがファシリティドックとして素晴らしい活躍をするニコと出会う。動物嫌いのロバートだったが、ニコの素晴らしい活躍や優しさに触れるうちに、次第に心を許していくようになる物語。ニコの愛らしさが作品に魅力を加え、読者の心を惹きつけている。

また、ニコがファシリティドックとして患者の生活をサポートする場面や、自身の能力を生かしている様子を描くことで、ファシリティドックの存在と必要性に対する理解や、人と動物との共生の在り方について考えを深めることができる作品となっている。

『たかがペット』って言わないで！  
こばやし きよ (群馬県)

〈受賞理由〉 愛猫のエルを失った小学五年生のありすは、クラスメイトのりつを通して保護猫トラと出会う。トラは、飼育するためのトライアル中に逸走してしまう。クラスメイトたちの協力によりトラが無事に戻ってくる過程の中で、地域猫やTNR活動について丁寧に描かれ、「さくら猫」や「逸走」、「終生飼養」といった猫の福祉愛護の理解を深めることができる作品である。

また、りつの「トラは生きてるんだ。ほくらと同じように、生きてるんだ。」というけんごへの言葉は、読者に対しても、動物も私たちと同じように生きていて、感情や要求があることを認識し、人と動物が共生するよりよい社会づくりのために私たちがどのような責任を負い、果たすべきなのかを気付かせるような重要なシーンとなっている。

「サヤのおはなし」 高橋久美子 (山形県)

〈受賞理由〉 ツキノワグマの子熊サヤが熊の家族のぬくもりと自然の四季を体験しながら成長していく物語。森にすむ野生動物の生態や共生について詳細に描かれており、読者は飽きることなく作品の世界に没入できる。特に、森の恵みを食べる描写は、読者の味覚までも刺激するようである。

また、温かい話だけではなく、動物から見た自然の厳しさや人間の身勝手さ、人間から見た害獣の問題など、人と野生

動物との関わりの厳しさと難しさが描かれており、自然に読者が動物と共生する大切さや相互理解の重要性に気付くきっかけになり得る作品である。

なお、入賞作品のうち大賞、優秀賞作品を収載した「第35回 日本動物児童文学賞受賞作品集」をご希望の方(1人1冊に限る)に頒布いたします。希望される場合には、住所、氏名、電話番号、上記作品集希望の旨を明記の上、切手310円分(送料)を同封し、下記までご連絡ください。

【連絡先】

〒107-0062

東京都港区青山1-1-1 新青山ビル西館23階  
公益社団法人 日本獣医師会 事務局

「第35回 日本動物児童文学賞受賞作品集」担当

お問い合わせ：TEL 03-3475-1601

FAX 03-3475-1604

E-mail : bungaku@nichiju.or.jp